

日本初かつ最大の鉄筋コンクリート造大仏

ー至高の職人わざ、今では誰も出来ないー

■名鉄常滑線の電車の車窓から、山上の大仏を見たことがありますか

名古屋鉄道に乗って知多半島へ向かうと車窓から海とは反対側の山の上に木々の上から巨大な大仏の頭が見えてくる。この大仏は日本初の鉄筋コンクリート（一部鉄骨入り）造であるとともに日本最大（高さ18.5m）の大仏である。この大仏を造らせたのは岐阜県厚見郡の山田才吉（1852～1937）であった。

彼は家業の漬物業で守口漬け（守口大根味噌粕漬）の考案を始め、名古屋市内に東陽館・南陽館といった巨大な料理旅館の経営も行った。しかし、東陽館を火災で南陽館を水害で失っているが、その旅館の存在感から今でも名古屋市の地名として東陽町（東陽通）、南陽町（南陽通）として残っている、大正末期、山田才吉は昭和天皇御成婚記念事業として知多郡上野村（現在の東海市）に大仏の建設した。この巨大な大仏は火災にも水害にも負けないものを願った。



聚楽園のコンクリート造大仏（2020年撮影）

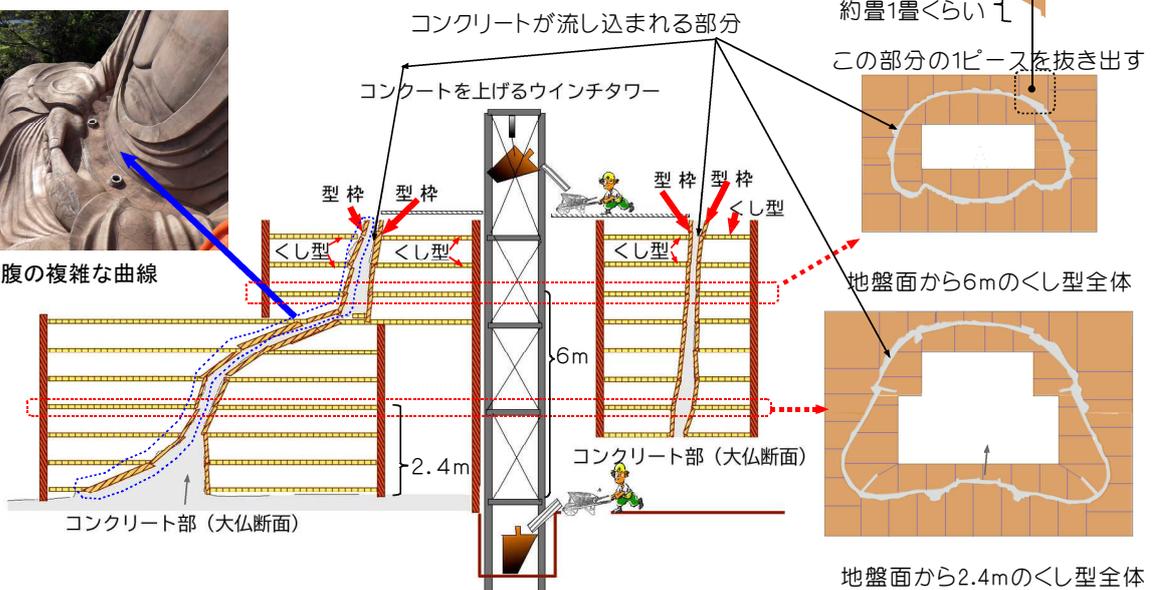
■驚異の技術、コンクリート造大仏

コンクリート造はベニヤ等で入れ物（型枠）を作りその中に練ったばかりの柔らかいコンクリートを流し込み、コンクリートが固まったら、その（型枠）を取り外して硬化したコンクリートを建物として利用するものである。この大仏でも同様ではあるが、左下写真のように建物と違い表面が直線では無く、複雑な曲線となっている。言い換えれば流し込む入れ物（型枠）をこの曲線にしなければならない。この型枠を曲線で保持するためには、くし型と呼ばれる型枠止めを作らなければならない。このくし型は内外・上下・左右で気が遠くなるくらい違った形のものが必要となる。下中央図は大仏の工事の垂直断面図である。中央部の鉄骨ウインチタワーはコンクリートを下から上へ運んで、上から型枠に流し込んでいる。このくし型の地盤面からの6mの高さと1.8mの高さのくし型を右下図に示す。このくし型は20枚（水平断面）以上は作られたと思われる。

当時まだ始まったばかりのコンクリートにもかかわらず、超高難易度かつ超高強度（一般的な建物の4倍くらい！）コンクリート造を造りだしたのは、建築家でもゼネコンでもなく、海部郡七宝町の後藤鐵五郎（1892～1976）というコンクリート造形職人とその仲間であった。



大仏のお腹の複雑な曲線



大仏工事中の垂直断面図（筆者作成）

（長谷川哲也）